

福教大研究者ら5月から3年かけ

「いじめ」解決策求め ウイグルへ調査団

素朴な自然と民俗のなかで暮らす子どもと、産業化社会のなかで育つ子どもは、どこでどう人間形成に違いが出てくるのか。福岡教育大学の研究者を中心とした学術調査団が中国の新疆ウイグル自治区を舞台に、五月から三年がかりで調査研究を始める。ウイグルの子どもの生活環境を丹念に追跡することで、日本が抱えた、いじめや不登校などの背景や原因を探るのがねらいだ。発展途上にある少数民族の子どもとの比較研究はきわめて珍しい。



障害児も参加する日中友好交流子どもキャンプ。これが今回の調査の引き金になった1995年8月、中国青海省の青海湖のほとり（碓さん提供）

大自然 家庭 伝承遊戯：

子供の生活環境にカギ？

日本と比較し原因を探る

調査団は福岡教育大学の碓浩一教授（精神医学）を研究代表者に、同大学の横山正幸教授（発達心理学）、亀口憲治教授（臨床心理学）、三本

たちと交流させてきた。その結果、帰国後、不登校児が学校に行くようになったり、児童、生徒が目的意識を持つようになったり、と成果をあげてきた。

さらに一歩進めて、ウイグルの子どもが置かれた家庭、地域社会、文化、風土など環境全体をくわしく調べるため、文部省に研究費を申請、認められた。

対象地域は首都ウルムチとトルファン、カシュガル、ホータン地方。テーマは「不適応児・障害児の処遇につい



松正敏教授（スポーツ社会学）ら八人と、中国側からも専門家三人が加わる。調査は、碓さんらが七年前から新疆ウイグル自治区で毎年行っている「日中友好交流子どもキャンプ」の延長線上にある。障害児や不登校児を含め福岡県内の四十人前後を天山山脈などの大自然のなかで遊ばせ、少数民族の子ども

の「実態調査」「家族インタビュー」の心理学的調査、「伝承遊戯の調査」など多方面にわたっている。

ベースのひとつになる予備研究で、すでに奥行きと広がりを与えさせるデータが用意されている。福岡教育大学の大学院に籍を置くウイグルからの留学生リスワン・アブリミティさんが去年の夏、ウルムチに滞在し、調査団にも参加するリスワンさんは、ウイグルには日本で見られないような集団によるいじめがいまのところないからだと語る。なぜないのかは興味深いテーマで、親、教師、地域社会などが子どもの成長にどうかかわっているかを追究することで日本のいじめや不登校の本質が見えてくるのではないかと指摘する。

調査団長の碓さんは「子どもは異なるものとふれあいながら成長していく。いまの日本は均一の空間に子どもを閉じ込めている。生き生きとしたウイグル社会を深く観察することで、日本の子どもを取り巻く問題群に対処する方策が見つかるとはならないか」と話している。